

V 総合考察

研究1では、アンケートや聞き取りにより支援の実態調査を行い、支援を充実させるために必要と考えられる視点を見出した。

研究2では、これらの視点から実践を見直し、その有効性を検証した。

以上の結果から、学校不応答の児童・生徒への支援を考える上で重要な視点は、以下の4つにまとめられる。

- 1 支援環境の整備
 - ・ボランティア等の人的環境整備
 - ・校内適応指導（支援）教室等の物的環境整備
 - ・未然防止のためのプログラムや校内委員会，対応マニュアル，児童生徒に関する資料充実等の学校体制整備 など
- 2 適切な見立て
 - ・全職員の不登校に対する共通認識に基づき，ケース会議等で，児童生徒の特性を踏まえ，多くの教員が多面的に分析した見立て
 - ・子どもと親のサポートセンター作成の「見立てシート」や「気になる児童生徒チェックシート」の活用 など
- 3 支援者の資質向上
 - ・よりよい支援に向けた支援者自身の意識的な取り組み
 - ・研修の定期的な位置づけ
 - ・専門的知識を持つ外部講師を招いた研修 など
- 4 関係機関との連携
 - ・十分な準備を前提とした，定期的な情報交換の場の設定
 - ・日常的な交流 など

これらの視点に沿った支援は，それぞれに重要なものであるが，複合的に行うことがより効果的であることは言うまでもない。具体的な支援を行う場合，この4つの視点をふまえて見直すことで，支援をより充実させることが可能になる。

本研究では，児童生徒を取り巻く環境が複雑化するとともに，問題が多様化する中，実際に支援にあたっている方の努力と苦勞を感じることができた。また同時に，「支援環境の整備」「適切な見立て」「支援者の資質向上」「関係機関との連携」のための，多くのすばらしい実践を知ることができた。

支援者の抱える困り感の中には，子どもと親のサポートセンターの研修会や学校支援が有効と思われるものも見られ，当センターの事業周知の不備も感じた。今後，当センターには，本研究を活かし，学校や関係機関への支援を充実させることが求められる。各学校や関係機関から得られた貴重な実践を参考に，少しでも支援者の負担を軽減し，効果的な支援の助けとなるよう，研修内容の検討と参加機会の拡大，事業のさらなる広報など，業務内容の一層の充実を図っていかなければならない。

研究協力者（敬称略）

【通年講師】

千葉大学教育学部 准教授 磯邊 聡

【研究協力校及び機関】

M小学校

N中学校

O高等学校

P高等学校

Q教育支援センター

R教育支援センター

S高等学校

【担当所員】

所長 黒岩 明

次長 塚本 剛（平成24年度）

次長 小林 克彦（平成25年度）

次長 榎本 政江（平成25年度）

支援事業部長 伊豆 守彦

支援事業部 主席研究指導主事 石塚 由乙（平成24年度）

研究指導主事 津吹 哲男

研究指導主事 片岡 正行

研究指導主事 藤本 真由美（平成24年度）

研究指導主事 津島 みなと（平成25年度）

研究指導主事 真田 忠之

副主査 寺元 真

指導主事 御園生 洋一（平成25年度）

※研究協力校及び機関については、平成25年度依頼

※担当所員については、（ ）内は担当年度，その他は平成24・25年度
継続担当

千葉県子どもと親のサポートセンター研究報告書 第12号

テーマ 学校不適應の子どもへの支援の在り方
～子どもの居場所の実態調査を踏まえて～
研究対象 小・中学校 高等学校 教育支援センター
研究領域 生活指導・生徒指導

学校不適應の子どもの支援には、適切な見立てと対応が求められる。そこで、子どもの居場所の実態調査を行い、子どもの支援者の現状と課題を把握し、よりよい支援の在り方を探った。学校や教育支援センターの優れた実践事例を挙げ、県下各地で不登校支援に努力される方々へのサポート・普及を目指す。

研究報告 第12号

平成26年3月31日

編集発行者 千葉県子どもと親のサポートセンター所長

黒岩 明

発行者 千葉県子どもと親のサポートセンター

〒263-0043

千葉市稲毛区小仲台5-10-2

TEL 043(207)6028

FAX 043(207)6043
